

—《書評》—

周斌著 加藤千洋・鹿雪螢訳 岩波書店

『私は中国の指導者の通訳だった
—中日外交最後の証言』

(元共同通信記者) 中島 宏

本書は中国外交部の日本担当官として、1972年の日中国交正常化を初め、数多くの日中間の交渉、交流の場で通訳を務めた元中国外交部の周斌氏による回想記である。南京の工場のトラック運転手だった父親が南京大虐殺事件の後、何年間も行方不明になり、祖母に育てられたこと、故郷が日本軍に占領され、日本軍と新四軍との激戦が行われた地域であるなどの幼時の体験から、北京大学東方語学部に入学した際には各国語の中で日本語だけは考慮せずインド語を志望していた。しかし党の方針でやむなく日本語を選ぶことになり、軍国主義者と人民大衆を分けるとの政策や、国家として日本を理解する通訳、研究人材を育成する必要があるとの説得にしぶしぶ従うことになったことを率直に告白している。

評者は1970年代、80年代の北京駐在記者時代に外交部新聞司にいた著者と知り合った。彼の家庭的な背景については聞いていなかったが、彼と意見が異なることがあっても、日本に対する何らかの偏見を感じることはなかった。むしろ何事について率直で誠実な彼の態度は、当時の日本人記者の間でも好評だった。またその後も長年にわたる日本人の友人が数多く、日本を第二の故郷とする人もある。本書は、そうした著者らしい率直な姿勢に基づき、その豊富な経験を描いており、現代中国の指導者たちの生の人間像や日中関係の歴史を理解する上で大変貴重な書といえる。

内容は、第1章から第3章まで「日本語通訳への道」、「よき通訳になるための基本条件」、「通訳の責任と範囲」と題して、中国独特の外交部通訳の役割を説明する。第4章以下は、「忘れ難い10回の通訳」、「忘れ難い中国人」、「忘れ難い日本人」

と並んでいる。

▽高い通訳の地位

1~3章の通訳に関する部分では、中国共産党・政府の独特的な通訳の重視と、徹底的な育成ぶりを著者の実際の体験を通じて紹介している。中国のそれは単なる言葉の仲介だけではなく、機密を守り、規律順守の他に、服務員、指導者の参謀、警備員の職務をも持っているという。そのために北京大学時代には、日本語の他に中国革命史、内外の歴史から古代・現代の漢語、政治経済学、弁証法など多くの必須科目を学んだ。もちろん他の国の外国語専門家も当然ながら内容は異なる多くの教養科目を学ぶ。しかし、中国の要人付きの通訳は周恩来以来の方針により、それ以上に多くの知識が必要とされているように見える。それだけに通訳の政治的地位も高く、最近4代の外交部長は唐家璇・現中日友好協会会长から現在の王毅氏まで皆そろって通訳出身である。

▽国交正常化の大平・姫鵬飛会談

第4章にまとめられた著者の10回の主な通訳経験の中で最も注目されるのは、日中国交正常化交渉の際の大平正芳、姫鵬飛両外相の会談の通訳だろう。交渉は、初日の歓迎宴会で、田中角栄首相が日本の対中戦争について表現した、いわゆる「ご迷惑」発言問題を口火として、歴史認識をめぐり難航していた。それをどう打開するか、両外相が万里の長城に行く車中で行った会談を著者が通訳した部分がハイライトだ。著者によると、大平外相は自ら提案した姫鵬飛外相との車中会談で、戦中の感想からみて、日中戦争が明らかに「侵略戦争」であることを認め、また田中角栄首相も戦争のことはよく分かっているとするとともに、日本政府の置かれた立場を説明、交渉をどうしてもまとめたいと語ったという。会談には日本側の通訳は参加しておらず、今や著者が唯一の証言者ということになる。

姫外相は帰ってすぐに周恩来首相に報告、その

深夜に毛沢東会見があり、評者も加わっていた日本の取材記者団も交渉が山を越したと感ずることになった。

その後、大平外相が「ご迷惑」に代わる表現について、「日本が戦争を通じて中国人民にもたらした大きな災いに対して、責任を痛感し深く反省する」とのメモを姫外相に渡し、これを基に共同声明の案文がようやく整い、問題が決着したという。

ところで、田中首相の「ご迷惑」発言に関連し、周恩来首相が事前に知っていたかどうかの点で、著者が、日本側の挨拶文を通訳である著者も見ていないかったので、周恩来首相も知らなかつたはず、としているが、この点はどうだろうか。この挨拶は日本側が訪中して最初に公開される外交文書でもある。当時、演説の印刷担当の外交部員が日本側に抗議したとの話がある上、問題になった後に「日本の案をそのまま印刷しました」とわざわざ断る外交部の日本担当者がいたことを考えると、万事綿密な周首相が事前に知っていた可能性があるように思える。

また毛沢東主席が田中首相との会見で『楚辞集注』6巻を贈ったことで、日本国内では様々な憶測があるが、著者は「ニクソンにも贈っており、愛読書を贈ったというだけのこと」と断定しているのが目につく。

日中国交に関する政府間交渉の直前には、72年7月、竹入義勝公明党委員長が訪中して周恩来首相と会見、中国側の交渉に関する条件を持ち帰り、田中首相が訪中するきっかけとなった。この件では、竹入氏本人が訪中は田中首相の依頼ではなく、自分の考えでの独自の行動と明言しているが、著者はあっさり「田中首相に頼まれての訪中」と断言している。

著者のもう一つの大きな通訳の機会は、1971年に名古屋で開かれた世界卓球選手権大会での中国のピンポン外交の際の通訳の任務だった。その取材の経験がある評者の見た内容とは少し違うところもあるが、当時の動きが詳述されており大変興味深い。

▽指導者のエピソード

「忘れ難い中国人」の章では著者の通訳を特に信頼し、育て、著者が尊敬している周恩来、廖承志両氏の様々な場面での訓示や指示が詳細に紹介されている。また陳毅、鄧小平、胡耀邦、華国鋒、郭沫若など各首脳らの通訳経験、さらには林彪や4人組と言われる左派の印象まで含め、それぞれの人柄を示すエピソードが数多く描かれており、現代中国を知る上でヒントとなる素材が満載されている。

▽大学恩師から田中、大平氏など

「忘れ難い日本人」の中では、北京大学の日本語専攻の恩師だった日本人3人の専門家のことが最初に詳しく語られている。著者の日本観を育てたのは、これら人格、知識共に優れた教育者であったのだろう。

日中間の政治では、国交回復の少し前、72年4月に訪中した三木武夫代議士のことが触れられている。彼は中国の日中国交3原則を認め、国交回復のために行動すると明らかにした。当時この部分は外部に明らかにされていたが、著者の記載によると、予備会談では対外友好協会会长の肩書で応対した王国権氏が尖閣諸島の領有問題を執拗に提起し、三木氏は会談を中止し帰国も考えたが、周恩来首相が王氏を「左派」と批判して論争をやめ、三木氏の訪中が成功する結果となったという。

尖閣問題での周恩来の立場は表向き日中国交という「大事の前の小事」というレベルのみで受け止める向きが多い。しかし前述の国交交渉の直前に訪中した竹入公明党委員長に語った尖閣問題での発言などを見ると、周首相は、単なる「大事の前の小事」というだけでなく、領土問題を拡大して両国間の永久の紛糾材料にしたくないと強く考えていたと評者は推測している。三木訪中の際のエピソードもそれをうかがわせるものと思われる。

またこの辺は触れられていないが、三木氏のお別れ宴会では、王国権氏が日本の佐藤栄作首相と共に、その有力な後継者と目された当時の福田赳氏外相の名前も挙げて非難している。前後の田中氏と中国側の動きから、中国側はこのころに佐藤後継の田中、福田両氏のうち、田中氏と交渉する方針を内々に固めたと見ることができそうにも思えるが、どうなのだろうか。

同じく「忘れ難い日本人」の中にある田中首相の退陣の理由はアメリカが彼に不満だった要素もあるが、国内経済の失敗が根本原因とする見方を取っている。中国の一般的な見方なのだろう。大平氏については、当時、日本政界と交流のあった中国人に日本の政治家で誰が最も日中関係の改善と発展に貢献したかと問えば、大多数が彼に最高点をつけるだろうとしている。

78年に日中平和友好条約を締結した福田赳氏に関しては、三木内閣の副首相だった彼が、三木

首相退陣の原因は対中政策で消極的だったことがあると考え、有利な国際情勢を機に実現したと評価している。しかし福田氏の対中観はかつて汪兆銘政権の顧問をしていたことなどを中国側に無邪気に公言するなど、中国側を困惑させる一面があったという。最近、日本の研究者の中には、日中正常化は田中でなくして福田でも可能だったとする見方も出ているという。72年当時の日中関係や日本国内政治についての取材不足が原因と思われるが、本書の福田氏に関するエピソードはそれを考える上で参考になろう。

全体を通じて、著者の通訳体験での恐るべき政治的事件となりかねないミスやほほ笑ましい失敗などを含めて描かれており、中国における通訳の仕事の華やかさと難しさがよく理解できる。

なお本書は香港で出版されたものの、大陸内の出版はまだ実現していない。

(2015年2月刊、358ページ、本体4,200円+税)

中国研究所図書館利用案内

●所藏資料：

所蔵数は約45,000冊。戦前から現在まで中国において発行された社会科学・人文科学系の図書、定期刊行物を所蔵しています。

●開館日時：金曜日（予約制）午前10時～正午、午後1時～5時

●利用料金：

	閲覧料	複写料
所員	無料	10円
研究会員	無料	20円
一般(団体)	1,000円	100円
一般(個人)	700円	30円
大学生・大学院生	300円	20円
留学生	無料	20円

●利用方法：

書庫は閉架式をとっています。館内備付けのカード目録またはCiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books/>) にて請求記号をお調べください。係員が書庫より資料をお持ちします。なお、館外への貸出は行っていません。

●資料郵送・FAXサービス：

所蔵する図書資料等の複写をご希望の場合は、郵送またはFAXで送付いたします。料金等詳しくはお問い合わせください。

●お問合せ先：

中国研究所図書館

TEL : 03-3947-8029 FAX : 03-3947-8039

E-mail : c-lib@tcn-catv.ne.jp URL : <http://www.chuken1946.or.jp/>

